

紹介

赤松俊秀教授退官記念事業会編

『赤松俊秀教授退官記念 国史論集』

京都大学名誉教授文学博士赤松俊秀先生の京都大学文学部定年退官を記念して、京都大学での受業生および関係者から献呈された論文七〇篇を収載する大冊『赤松俊秀教授退官記念国史論集』が、過日、刊行された。赤松博士は、明治四十年、北海道右狩国上川郡鷹栖村に生まれられ、道庁立旭川中学校、第三高等学校を経て、昭和三年京都帝国大学文学部史学科に入學、国史学を専攻して、昭和六年に卒業された。ついで同文学部副手を経て、昭和七年、京都府史蹟勝地保存委員会臨時調査委員、昭和十五年には京都府主事に任ぜられ、学務部社寺課に勤務された。以後、昭和二十六年八月まで、京都府にあって史蹟・寺宝など文化財調査に専念された。また、昭和二十四年には、全国にさきがけて設立された京都

府教育委員会文化財保存課の初代課長に就任されて、新たな文化財保護行政に尽力されたのである。その後、昭和二十六年八月、京都大学文学部助教授に転じられ、昭和二十八年、教授に昇任、国史学第二講座を担当され、昭和四十六年三月、定年退官をむかえられた。

赤松博士の学問的業績は主著『鎌倉仏教の研究』『続鎌倉仏教の研究』『古代中世社会経済史研究』『京都寺史考』にも窺えるように、社会経済史・政治史・仏教史・美術史など多方面にわたっている。さらに『醍醐寺新要録』『隔黄記』『教王護国寺文書』『国宝卜部兼方筆自日本書紀神代卷』など史料の公刊にも熱情を注がれ、学界に多大の裨益を与えられたのである。

博士の学生に対する指導は、厳しいながらも温情あふるものであった。とりわけ印象深かったのは、国史研究室所蔵文書を用いての古文書学の演習で、文字通り眼光紙背に徹して史料を読み指導される博士の姿影であり、『平安遺文』の演習では、ともしれば見過しがちの文書からさえ、いろん

な史実を手繰り出される読みの深さ、あの分厚いノートに象徴される研究蓄積の歴大さであった。こうした思いを抱くのは、決して私のみではあるまい。

博士は、真摯な研究態度で、受業生を厳しくかつ温かに指導され、ここに多くの後進者が育った。今後ますます御壮健に、末永く私も後進を御指導下さるようお願い申し上げる次第である。

本書には、各時代にわたる献呈論文七〇篇と、巻頭に博士の最終講義にかわる論攷及び略年譜・著作略目録を収載する。以下、収載論文のタイトルと執筆者を紹介する。

平清盛の信仰について 赤松俊秀
古代史研究に於ける史料——三、四世紀の日本—— 林屋辰三郎
倭の五王の外交——司馬曹達を中心に——

坂元義種
毛野地方の部民分布について 吉田 晶
いわゆる「難波遷都」について 門脇慎二
孝徳紀の叙述と編成 八木 充
和風諡号と神代史 上田正昭
平城京と条里制地割 秋山日出雄

磐之媛皇后と光明皇后

直木孝次郎

律令国家の浮逃対策

鎌田元一

右京計帳手実について

岸 俊男

争戸について——律令の良賤制成立過程

丹生谷哲一

の側面——

荣原永遠男

行基と三世一身法

蘭田香融

知識と教化——古代仏教における宗派性

の起源——

奈良時代に於ける釈迦信仰について

——東大寺大仏の造頭と釈迦信仰の関

係——

大和国府について

九世紀における農民支配の変質——「公

民」から平民百姓へ——

公营田政策の前提

不堪佃田奏の成立

栄山寺の興福寺末寺化をめぐる

院政期貴族の帝王観

知行年紀制の発生に関する考察

弘福寺領大和国広瀬庄について

井上寛司

『洛陽田楽記』をめぐる

井上満郎

中世宇佐宮領編成の一・二の特質

工藤敬一

九体阿弥陀堂小論

大石良材

建久元年の歴史の意義

美術史料としての浄土寺縁起

裁判至要抄に見える悔還権について

聖靈院太子講式について

高田専修寺の草創と念仏聖

弘安八年周防国与田保田検帳

東大寺領大和国河上庄の構造

日野資朝小論——南北朝時代公家動向の

一側面——

建武政権の所領安堵政策について

——一同の法および徳政令の解釈を中

心に——

妙法院古文書若干について

伊賀における守護所の自立

室町時代の高野山領荒川荘について

一四・五世紀における二毛作発展の問題

点

三浦圭一

近江国徳珍保野方諸郷における農業生産

のあり方

大和の境域について——曾爾・御杖・龍

口を中心に——

中世畿内における借錢・借米の位置

——天文十五・六年の場合——

中世末期の地主的土地所有——美濃国龍

徳寺の売券——

戦国時代の加地子得分

播磨国衙と称名寺について

東寺百合文書の伝存に関する二・三の間

織豊期の堺代官

豊臣政権と島津氏

毛利・小早川氏と真宗——山口端坊

文書の分析——

小倉家文書について——上杉景勝、上杉

鷹山関係史料の若干——

狂言固定の歴史的前提

近世美濃における本願寺教団の発展

幕藩制下の仏教——宗旨・寺替をめぐる

細川道夫

熱田 公

黒田 俊雄

村山 修一

松山 宏

熱田 公

て——

北西 弘

大正デモクラシーの一水脈——石橋湛山

徂徠先生年譜細君墓表神主一卷

今中寛司

とその先行者たち——松尾尊允

安藤昌益の史料と儒教思想

三宅正彦

昭和初期の石川三四郎——個人紙『ディ

高槻藩の心学禁令と手島堵庵「社約」の

柴田 實

田中真人

成立

柴田 實

國家総動員に關する一考察——「國家総

天満天神社と大坂町人——大塩の乱前後

時野谷 勝

「動員法」成立前史——里上龍平

における——

時野谷 勝

(菊判一、二五〇頁 一九七二年二月 赤

近世における地球計測の一例——加賀藩

高瀬重雄

松俊秀教授退官記念事業会刊 京都大学文学

士 蓮藤高環の場合——

高瀬重雄

部国史研究室内誦史会 六、五〇〇円 送料

文久元年の高山銀紋吹所経営改革

前田保治

実費) (和田 萃 京都大学助手)

幕末、薩摩藩の鑄錢について

小葉田 淳

撰津国一橋領知の石代

酒井 一

福沢諭吉の少年時代

ひろた・まさき

宝祚節不制定始末

有泉貞夫

D・W・ラーネットの政治学講義につい

て

伊藤侯の訪英について

杉井六郎

一八九七年の營業稅反對運動——その若

彭 澤周

介 干の局面について——

江口圭一

厦門事件について

山本四郎

明治期の公共図書館

莖上 衛

公開講演

クリミア戦争と東アジア

桐山女学院大学教授 中山治一氏

関東大震災以後五十年

京都大学助教授 松尾尊允氏

会告

左記のごとく史学研究会大会および総会
を開催いたしますので、多数御参加下さ
い。

日時 十一月二日(金)午後一時より
場所 京大楽友会館

一九七三年四月二十五日印刷 定価四五〇円
 一九七三年五月一日発行

史 林 (第五六巻第三号)

京都市左京区吉田本町
 京都大学文学部内

発行人 史 学 研 究 会
 理事長 羽 田 明
 振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社
 京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇